ふるさとの民話　（第四十八話）

『泣く子も黙る椎の木の天狗さん』

観音森のほど近いところに、「源十屋敷」があったそうな。
そのまわりは、うっそうと樹木が繁っていたそうな。
その屋敷に、一本の椎の大木があったそうな。
ずっと昔から、「天狗さんが住みついていた。」と言い伝えられていたそうな。
近所の子どもらが、いたずらをしたり、大人の言うことを聞かなかった時、
「源十屋敷の椎の木の天狗さんにいうぞ。」と、おどかしたそうな
すると、子どもらは、たちまち、言うことを聞いたそうな。
「天狗さんが来るぞ。」というと、泣いた子どもも黙ったそうな。

（若林町　伝承　武内喜男　集録）

→